様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2016
課題番号：２４５２０２６９

研究課題名（和文）マーカス・ガーヴェイとハーレム・ルネッサンスの黒人たち―その反目の裏と表

研究課題名（英文）Marcus Garvey and African Americans in Herlem Renaissance

研究代表者
君塚　淳一（Kimizuka, Junichi）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：６０２５９５８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：民族主義、アフリカ回帰運動、分離主義などを標榜し、多くの貧しい黒人たちから支持されていたマーカス・ガーヴェイは、当時、汎アメリカ主義が進み、ハーレム・ルネッサンスが注目されたにも関わらず、黒人たちからも批判された。特にデュボイスはかつて敵対したワシントン亡き後、ガーヴェイをも攻撃し、彼は政府から批判され、郵便法違反で逮捕、ジャマイカへ強制送還された。ワシントンは白人と融和し、ガーヴェイは対峙したことで政府からの批判も異なるが、そこには国内での人種独立分離、回帰運動先リベリアの豊かな自然資源という利権、ハーレム・ルネッサンスの黒人たちのパトロン事情、デュボイスのプライドなどが原因であった。

研究成果の概要（英文）： Despite the world in the 1920s experiencing Pan-Africanism, which caused the Harlem Renaissance in the US to thrive, Marcus Garvey who championed African American ethnic identity and the “Back to Africa movement”, was highly criticized even by intellectual African Americans. W. E. B. Du Bois especially continued to argue against Garvey, after who replaced his former opponent, Booker T. Washington. On the other hand, the other rest of the writers of the Renaissance almost completely ignored Garvey. Garvey, after all, was nearly assassinated, convicted of a charge of mail fraud and finally deported to his native country, Jamaica. That was because of his ideas: Racial Separatism in America, and constructing his nation in Liberia with rich natural resources. These were regarded as a threat by the US government, and as a result raised the writers’ concerns about displeasing their white patronesses and undermined Du Bois’ claim of the “Talented Tenth”.

研究分野：アメリカ文学，文化

キーワード：マーカス・ガーヴェイ　ハーレム・ルネッサンス　WEBデュボイス　ブッカーTワシントン　アフリカ帰還運動　ポール・カフェ　ニグロタリアン　白人パトロン

１．研究開始当初の背景

マーカス・ガーヴェイの一般的評価と言えば、いまだに１９２０年代に「アフリカへ帰ろう」と貧しい黒人たちを扇動して金を巻き上げ、挙句には逮捕されアメリカから国外退去させられたジャマイカ出身の「いかさま師」というイメージに違いない。

だがそれに反してアフリカ系アメリカ人史におけるガーヴェイの評価は異なる。彼の運動は６０年代の「アフリカ」を意識した民族主義や、マルコムXで知られたブラック・ムスリムが主張する「アメリカ白人社会からの分離主義」という民族主義高揚の中で、徐々に認められるようになる。更にガーヴェイがエチオピアの皇帝誕生を予言したことやその思想ラスタファリズムにガーヴェイが影響を及ぼしていること、またこれらガーヴェイの功績が７０年代以降人気が出るカリブ発祥のレゲエ音楽家たちを通じて広まるなどし、彼の評価は改められつつある。しかしながら現在のガーヴェイ研究の中心は、いまだ伝記であるか、あるいは彼のスピーチや原稿をまとめたもの、またそのカリスマ的存在から黒人リーダーとしてキング牧師やマルコムＸまたダグラスとの比較したものなどが主なものである。

２．研究の目的

本研究の重要な点は、ガーヴェイと彼が最も活躍した１９２０年代アメリカ、特にこの時代に注目されたアフリカ系アメリカ人の芸術運動「ハーレム・ルネッサンス」との関係を探るもので、なぜ６０年代以降、民族意識、分離主義など彼が既に２０年代に実行していた運動が当時の黒人たちに受け入れられずアメリカ政府から弾圧を受けたのか、を明らかにする研究である。

３．研究の方法

マーカス・ガーヴェイ、ハーレム・ルネッサンスを中心とする歴史的資料、文学（芸術）資料、伝記的資料を国内、国外の大学、図書館において収集し研究する。またアメリカ（特にハーレムを中心とする）の現地出張調査も行った。

研究代表者（君塚）は１９２０年代アメリカを総括して概観する立場をとりながら、専門であるマーカス・ガーヴェイの２０年代の動向とW・E・B・デュボイスとの関係をアメリカ、ジャマイカなどでの資料収集をして研究する。研究分担者（松本）は専門のゾラ・ニール・ハーストンの作品やその動向を中心にハーレム・ルネッサンスの作家たちとの関係からガーヴェイへの意識を探る。

４．研究成果

1920 年代のアメリカは、第一次世界大戦後の好景気に湧き、株価や土地の値段は天井知らずに上がり、その反面、貧富の差は拡大した。アメリカ黒人たちの大戦での貢献は、全く彼らには還元されず、その不満と絶望は高まるばかりであった。この不満に応えるべくアメリカに登場したのがジャマイカ出身のマーカス･ガーヴェイ(1887-1940)であった。そもそも彼が 1915 年アメリカを訪れた理由を、ディヴィッド・クロノンやメアリー・ローラーなど彼の主要な伝記で再確認しておくことは当研究において重要である。というのもこれが、ガーヴェイとアメリカの関係、また 1920 年代にアメリカ黒人が陽の目を見た「ハーレム・ルネッサンス」の黒人たちとガーヴェイが結果として対峙した原因と成りうるからだ。そして彼が目標としたブッカー T. ワシントン(1856-1915)との関係、敵対視された W.E.B. デュボイス(1861-1963)との関係、またとハーレム・ルネッサンスの黒人作家たちがそれに倣いなぜ彼と反目するに至ったのかを検証し結論づけることが本研究の目的となる。

(1)研究の主な成果

①　ワシントンに学べなかったガーヴェイ

Garvey の当初のアメリカ訪問の目的は故国ジャマイカでの黒人地位向上のための教育だった。それゆえ、南部で黒人への職業訓

練をタスキギー校で成功させていたブッカー T. ワシントンに教えを請うためであったことは知られている。アメリカ南部で元奴隷の ワシントンが南北戦争後のいわゆる南部再建運動後に、南部黒人の職業訓練学校をアラバマ州タスキギーに建て、その寄付や卒業生の就職先探しに奔走する中、北部の白人財界人と親しくなり、大統領とまで親しくなり、南部の黒人をまとめる存在にまでなっていたからだ。ここで指摘しておくべきはまずワシントンが特に白人有力者と友好を深め信頼を得ていた点である。それは訓練学校の維持かつ学校を広く展開させていくため必要なことで、最も重要なことであった。

これはワシントンの自伝『奴隷から身を起こして』(1901)や最新の伝記ロバート・ノレル著『歴史から身を起こして: ブッカー T. ワシントンの生涯』(2003)などを確認し明らかにした。だが更に最新の研究デヴィッド・ジャクソンの『ブッカー T. ワシントンと白人至上主義への闘い』(2006)などではワシントンの「寄付や雇用を望む白人用の顔」と「黒人種・民族の高揚を推進する黒人用の顔」の二面性が指摘されている。彼はその両面を巧妙に使い分け、「南部」では底辺で彷徨う黒人たちを率いて方向を指し示し、「北部」では南部黒人の代表として学校運営の資金調達という、まるで「南部黒人王国の王か大統領」であるかのように君臨していたと称しても過言ではない。この点ガーヴェイの最終的に目指す方向、つまり「アフリカにアメリカ黒人の国を建設し自分が大統領となる構想」と一致するから興味深い。

さてガーヴェイがアメリカでこの ワシントンに面会し、母国での黒人の教育への助言を求めようとしていたことは既に述べたが、現実にはそれはワシントンの直前の死により実現していない。ガーヴェイがワシントンのこの奴隷制時代の奴隷の生きる術に遡ることができる巧妙な「二面性」を理解していなかったことは明白で、ガーヴェイがワシントンに面会し、ワシントンからその術を伝授されていれば、アメリカでの彼の運動にも異なる展開が期待されたであろう。この点への考察は口答発表（英米文化学会第 142 回例会,H25 年 11 月 9 日）と論文（茨城大学教育学部紀要 63 号, 2014）にて発表した。

② デュボイスとの反目へ

ラバン・ヒルは『ハーレム・ルネッサンスの文化史』(2003)で「NAACP（黒人向上委員会）までもがガーヴェイの情報を政府に提供し、政府は郵政法違反でガーヴェイを逮捕し強制送還した」と「ハーレム・ルネッサンス」を語る著書では珍しくガーヴェイへの当時のネッサンスのアメリカ黒人たちの態度にも批判的だ。関連図書では概して Garvey に触れないか、当時の作家やインテリの彼への批判的な態度を追従して、彼を「異質」な存在として取り上げるのみであるからだ。

この前述 NAACP（全国黒人向上委員会）とは言うまでもなく、元は「アメリカ黒人のアメリカでの人種的な向上」を宣言した 1905 年の「ナイアガラ運動」に始まる、ガーヴェイを敵対する W.E.B. デュボイスの息のかかった団体である。本来、「アメリカ黒人への冷遇改善と人間としての権利」を主張することを主眼としている点で、ガーヴェイと同等にあるべき団体だ。だがそれぞれの主張で別れる点があるとすれば、それはガーヴェイの民族主義を標榜する「アメリカ黒人のアフリカ帰還運動」とアメリカにでも白人とは分かれ独立を目指す「分離主義」という点だろう。

しかしアフリカに関するならばデュボイスもガーヴェイも「パン・アフリカ主義」では一致が見られる。まずデュボイスがパリで 1919 年に開催した「パン・アフリカ会議」にガーヴェイも出席し、当時の西欧諸国で動き出していたアフリカへの政治的関心という同じ方向を向いていた。これは第一次世界大戦後の若者の社会不信や人間不信が人間

の根源（プリミティブ）に回帰する傾向へと促すことになったことは周知のことだ。これにはその後、1920 年代の芸術の中心地パリやヨーロッパで、アフリカ・プリミティブな魅力で人気を博すジョセフィン・ベイカー(1906-1975)が、熱狂的に受け入れられたことも、この流れが本物であることの証明である。

またデュボイスがブッカー T. ワシントンに継いでガーヴェイをも批判の対象とし対峙した点を、その共通性から見るならば、ワシントンとガーヴェイには、「底辺で蠢く黒人たちを惹きつけているカリスマ性」を持つ点だろう。例えて言えばワシントンは「アメリカ南部の黒人王国」の「王」であり、ガーヴェイは「貧しいアメリカ黒人たち」を故国アフリカへ導く「救世主かモーセ」といったところだろう。彼ら二人は、白人アメリカで将来に不安を抱え路頭に迷う「黒い羊たち」に、具体的で分かりやすいヴィジョンを示し、彼らの未来に一筋の灯をともしたと言ってよい。この二人について当研究で明らかにした内容は、「ガーヴェイと B・T・ワシントン：ガーヴェイとワシントンにとっての大衆・教育・自立」として『茨城大学教育学部紀要．人文・社会科学・芸術』第 63 号に掲載した。

しかしこのカリスマ性を持つ２人に比べ、デュボイスと言えば、北部白人の中でエリート街道を躍進し、アメリカでの黒人の差別改善には「黒人の才能ある十分の一」がアメリカの頂点に入り込み、上から解決することを標榜していた。端的に言えばワシントンやその後のガーヴェイが相手にしていた「底辺の黒人」に対し、自分たちがやるからそれを「黙って待っていろ」ということだった。自身が掲げる運動に反する他の黒人指導者がアメリカの黒人大衆を率いているのに対し、秀才デュボイスが敵対するのは、あまりに幼稚で滑稽だが残念ながらそれが現実であった。彼がまずワシントンそして、その後ガーヴェイを敵対して、散々と書物や新聞で批判し続けたことはよく知られている。デュボイスが 1920 年代以降、アメリカ黒人インテリの中で中心的存在であったことは紛れもない事実であり、ハーレム・ルネッサンスの作家たちとの関係から、結果的に彼らもガーヴェイを敵対するに至ったことは、作家たちのガーヴェイへの無関心と時に批判的なコメントに表れている。その二人へのデュボイスの反目意識は、君塚が編者かつ著者として加わった「W.E.B. デュボイスによる伝記『ジョン・ブラウン』(『ジョン・ブラウンの屍を超えて』(2016)所収）や「1920 年代〈ハーレム・ルネッサンス〉のアフリカ系アメリカ人作家たちの出版事情」（『読者ネットワークの拡大』(2017)所収）においても検証済である。

③ ガーヴェイとハーレム・ルネッサンス作家たちとの反目

『アメリカ 1920 年代―ローリング・トゥエンティの光と影』(2005)所収の君塚著「マーカス・ガーヴェイとハーレム・ルネッサンス」で指摘したように、ハーレムは「黒人の街であったが金を出して楽しむのは白人で、黒人の芸術活動すべての資金は白人から出ていた」のである。当研究の今一つの課題はその究明にもあった。これがハーレム・ルネッサンスの黒人作家たちがガーヴェイへ反目する原因と関係するからだ。

1920 年代のアメリカは、アフリカ志向が、「ジャズの流行」と「禁酒法下での黒人街という危険地帯（ある意味で安全地帯）ハーレムのクラブ」を中心とした「もぐり酒場」の存在により、その相乗効果で繁栄した。その結果、そこに「白人パトロン」と「白人出版社」が目をつけ、彼らに資金的に支えられた「ハーレム・ルネッサンス」という文化運動にここで結びついた。中でもカーラ・カプランが、ハーレムの黒人作家たちを資金面で支えていた白人女性パトロンたちを扱った『ハーレムのミス・アン』 (2013)で取り上げる、ナンシー・キュナードや大富豪のシャーロッ

ト・オズグッド・メイソンらは黒人作家たちのパトロンとして特筆すべき存在である。この時代を代表するアフリカ系女性作家のゾラ・ニール・ハーストン(1891-1960)がメイソンから援助を受けてアメリカ黒人のフォークロアを取集し、その材料を元に多くの作品を執筆したことは周知のことである。このように当時のハーレム・ルネッサンスの作家群と白人パトロンや出版社との経済的な関係を考えると、まずガーヴェイの主張する民族主義から発するアメリカで白人からの分離主義は容易に受け入れられる訳がない。恐慌以後にその関係が終結せざるを得なくなると、徐々に黒人作家たちの中にはハーレム・ルネッサンスを白人たちのものだったと批判的に語る者も出てくるが、当時 1920 年代においては、彼等の芸術活動の基盤を揺るがす行為だからだ。しかしながら FBI のフーバーの思惑通り、アメリカにおける危険人物として郵政法違反で別件逮捕され、故国ジャマイカへ強制送還されたガーヴェイの濡れ衣を払拭しようとする者までは彼らの中にはアメリカには現れなかった。それにはアメリカ政府による「Garvey を危険人物」とした徹底的な攻撃が為された結果だった。

④危険な黒人ガーヴェイはアメリカの敵

1920 年代アメリカにとっての危険実物とは誰なのか。第一次世界大戦後のアメリカでは、愛国心を国民に扇動する気運が高揚し、「100%アメリカ人」という標語のもとに、自由主義に反旗を翻す社会主義者、それをもとに戦時中に反戦運動や徴兵拒否を主張した者、また貧富の差から労働運動に徹しストライキをうつ者。上記の反アメリカに関する行為を行う者すべてへの取り締まりを強化し、SOS（shoot or ship）つまり「撃ち殺すか船で追い返す」という標語のもとに政府は「赤狩り」を決行し、暴力でその対応にあたった。1920 年に冤罪で逮捕、1927 年に処刑され 50 年後に冤罪が認められ政府が謝罪した「サッコ、バンゼッティ事件」はその代表的な例である。

当時のアメリカ政府がガーヴェイを危険視した原因は上記に照らし幾つか挙げられる。まず①彼の社会主義的側面としては、貧しい黒人たちをカリスマ的に「扇動」して UNIA を組織し、アメリカの中に「アメリカ黒人の国」（いずれはもちろんアフリカのリベリアにアメリカ黒人の国建設の夢がある）を築こうとしていること。②その勢力はアフリカにも届いており、「アフリカ西海岸ではガーヴェイにアフリカを統一してほしいと望んでいる者たちさえ多くいた」こと。これは当時ハーレム・ルネッサンスで活躍し始めたラングストン・ヒューズが自伝で書いており、その勢力拡大規模は見逃せないこと。③さらにロスロップ・スタッダードの白人文明の崩壊を危惧した『有色人種の勃興』が 1920 年に出版され、その翌年にはハーディング大統領がこの本を引用して、既に他界しているワシントンを分離主義だと非難し、それが当時、ガーヴェイに継承されていることに気づき、当然、彼を危険視したこと。ガーヴェイはハーディング大統領のこの分離主義の解釈に称賛の電報まで送っている。④万が一、アメリカ黒人のアフリカ（リベリア）移住が進み、それがアメリカ黒人という国内の低賃金労働力が削減へとなれば問題であること。⑤移転先であるリベリア国内の自然資源は豊富でアメリカ白人政府への強力な競争相手（元アメリカ黒人のアメリカ白人への反撃）となることの懸念。おまけにヨーロッパやアメリカもこの資源開発に目をつけていたこと。⑥実現しそうなアメリカでの白人黒人分離によるアメリカの分裂。以上６項目について、当時のアメリカ政府がガーヴェイに対して脅威を感じる点が検証できた。この動きに敏感に反応したのがデュボイスであり、また「ハーレム・ルネッサンス」で活躍する黒人たちであった。何よりもガーヴェイとは距離を置き、反目する態度をとることが白人パトロンとの友好関係を継

続でき、また自分たちも安全であるのだ。

⑤本研究で明らかになったこと

これまで述べてきたように、「マーカス・ガーヴェイとハーレム・ルネッサンスの黒人たち」の間には 1920 年代が生み出したアメリカ黒人間の大きな差異が生じ、ラングストン・ヒューズがのちに指摘しているように、「恵まれた」と感じていたハーレム・ルネッサンスの黒人たちも結局は、白人の手の平の上で踊らされていただけだったのだ。だがそれまで注目もされず日の目をみない影に光が当たったという評価は当然できることも事実である。

しかし汎アフリカ主義の 1920 年代という共通した時代に、アメリカ黒人の地位向上という同じ方向を向いていたにも関わらず、反目することになったのは、ハーレム・ルネッサンスの黒人たちが、アメリカ白人政府の顔色を窺い、自分の利益と保身を考えたからである。既述したアメリカ白人政府のガーヴェイを危険視した 6 項目を以て、アメリカ政府は彼への暗殺を試み、それも失敗すると、リベリア政府にガーヴェイは社会主義者だと嘘の情報を流して移住の夢を壊し、KKK を使い分離主義の相談をさせ黒人たちを引き離し、最後は郵便法違反で冤罪により逮捕しアメリカから追い出すことに成功したのだ。

自分たちの利益を危うくするガーヴェイがアメリカから消え、デュボイスもハーレム・ルネッサンスの黒人たちも安堵したに違いない。しかし所詮、一時的な戦後の好景気に沸く 1920 年代に生み出された芸術運動は、1929 年の株価大暴落で終焉を迎えることになる。

(2)得られた成果の国内外における位置づけ、並びに今後の展望

研究発表において公表した研究の成果は、アフリカ系アメリカ文学・文化また、1920 年代の政治や経済についても、各研究者から反響があり、それにより学会でシンポジウムの企画なども行われることになった。更に、2017 年に出版した『読者ネットワークの拡大と文学館用の変化』に関しては、研究成果の発表により当研究の延長となる内容で編者から執筆依頼があり形となった。更に多民族研究学会を中心に 2018 年度に向けて『ハーレム・ルネッサンス』に関する研究書を刊行する予定がある。またガーヴェイに関しては海外でも伝記はこれまで数冊刊行されてはいるが、単独の研究書は出版されておらず、今回まとめた報告書を元に、研究書執筆の予定でいる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

(1)君塚淳一「ガーヴェイとワシントンにとっての大衆・教育・自立」(『茨城大学教育学部紀要 63 号』, 2016. pp: 1-10）査読無し

(2) 君塚淳一「Booker T Washington 再評価にみる教育、産業、人種―闘うより相手の懐に入り込み、油断させ、いずれは天下を取れ」（『多民族研究』9 号, 2016. pp: 7-16）査読有

〔学会発表〕（計　２件）

(1) 君塚淳一「自伝、日記、体験記―Booker T Washington 再評価にみる教育、産業、人種」（多民族研究学会第 24 回全国大会,シンポジウム,2015,7/25 国士舘大学）

(2) 君塚淳一「ガーヴェイとワシントンにとっての大衆・教育・自立」(英米文化学会例会 142 回例会,2013.11/9 日本大学)

〔図書〕（計　５ 件）

(1)君塚淳一『マーカス・ガーヴェイとハーレム・ルネッサンスの黒人たち―その反目の裏表』科研報告書, 2017.（pp: 1-44）

(2)小林英美、中垣恒太郎編『読者ネットワークの拡大と文学館用の変化』音羽書房鶴見書店, 2017.（pp: 281-289）

(3)松本昇、高橋勤、君塚淳一編『ジョン・ブラウンの屍を越えて』金星堂,2016.
(pp: 228-230, pp: 231-252)

(4)多民族研究学会編『エスニック研究のフロンティア』金星堂,2014.（pp: 82-91）

(5)松本昇、東雄一郎、西原克政編『亡霊のアメリカ文学―豊穣なる空間』国文社,2012.
(pp: 145-156)

６．研究組織

(1)研究代表者

君塚　淳一（KIMIZUKA JUNICHI）

茨城大学・教育学部・教授

研究者番号：24520269

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし